回復期リハビリテーション病棟における脳卒中患者の自宅退院に関連する運動 FIM 自立項目の組み合わせ：UpSet plot による可視化

金沢赤十字病院リハビリテーション科
中泉　大、内山　圭太、鷲田　恵、宮田　伸吾

背景

回復期リハビリテーション病棟に入院している脳卒中患者において自宅退院は重要な目標の一つである。日常生活動作（ADL）の評価には Functional Independence Measure (FIM)が広く用いられており、FIM 合計点や特定の項目と自宅退院との関連が報告されている。しかし、FIM 下位項目の自立の組み合わせと自宅退院との関連は従来の方法では可視化が困難であった。本研究では、複数の要因間の関係を視覚的に表現できる UpSet plot を用い、脳卒中患者の自宅退院に関連する運動 FIM 自立項目の組み合わせを明らかにすることを目的とした。

方法

2018 年 4 月から 2021 年 3 月までに回復期リハビリテーション病棟に入院した脳卒中患者 205 名（自宅退院 136 名、自宅外退院 69 名）を対象とした。死亡退院、急性増悪による転院、急性期病棟へ転棟した者は除外した。退院時 FIM の評価は各患者の担当理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、病棟看護師が共同で行った。対象者の退院時運動 FIM 項目を診療録から収集し、6 点以上を自立と定義した。自宅退院した対象者の運動 FIM 自立項目の組み合わせを UpSet plot を用いて可視化し主要な組み合わせを特定した。

結果

UpSet plot で可視化した結果、自宅退院した対象者において運動 FIM 自立項目の組み合わせとして、全 13 項目自立（22 名、16.2%）、階段以外の 12 項目自立（18 名、13.2%）、入浴・浴槽移乗・階段以外の 10 項目自立（14 名、10.3%）、全 13 項目非自立（11 名、8.1%）が主要な組み合わせであった。これらの 4 つの組み合わせは、自宅退院した 136 名のうち 65 名（47.8%）を占めた。

結論

本研究の結果から、ADL の自立度が高いほど自宅退院の可能性が高まる一方、入浴、浴槽移乗、階段といった項目が非自立でも自宅退院が可能であることが示唆された。これらの項目は介護サービスの利用や環境調整により対応が可能であると考えられる。この結果は、回復期リハビリテーション病棟における具体的な目標設定や退院支援に有用な知見を提供する。